活字中毒、である。

読書好きを、暗に自慢しているのではない。文字どおり、活字になった文章を無闇にありがたがり、活字から後光でも射しているかのように、ある種の権威を感じてしまう。そういう活字中毒である。

だからワープロ全盛期、文章を綴る必要に迫られると、一心不乱にキーを叩いた。キーを叩きさえすれば、ありがたい活字が次々に打ちだされるのだから、楽しい作業だ。何の苦痛も、ためらいさえも感じずに、ただただ水が流れるがごとくサラサラと、活字の山を築きあげた。

やがて、ワープロの印字部品が壊れた。

やむをえない。幸い、他の性能はまだ生きていたから、フロッピーから文章をディスプレイ画面にとりだして、原稿用紙にペンで写した。

――下手だ……。

活字という虎の威を失った、素の文章のあ

まりの拙さに、溜め息がでた。これではまるで、鎧を脱いだ貧相な雑兵、化粧を落とした年増の醜女……。

悪筆のせいだ、と、開き直りもできない。どんなに端正な文字でマス目を埋めても、肉筆によって、ありのままを白日の下に晒した文章はみすぼらしく、無様だった。

認めざるをえない。活字中毒の私にとって、活字の魔力は、かぼちゃの文章をさえ、きらびやかな馬車に装わせてしまうらしい。蜃気楼のような、そんなまやかしにも気づかずに、いい気になってキーを叩いていた自分に唇を噛んだ。

以来、文章を認めるさいは、ともかくもペンで書く――それが私の習慣になった。

清書はパソコンでもよい。しかし下書きは、面倒をいとわずに必ず筆を執るべしと、時代の流れに逆らって、襟を正しつづけている。